

# 朝鮮半島の歴史と平和への道

徐正敏

(明治学院大学教授、キリスト教研究所所長)

## 朝鮮半島の分断以後の現代史

1. 1945年8.15の解放と分断：歴史の「事件名」

2. 38度線の「ハン」

3. 1950年6月25日朝鮮戦争

世界戦争のランキング：戦争史の単純ランキング、社会心理学のトラウマ指数のランキング

おおよそ500万人の死亡者（南北軍の兵士、南北の民間人、アメリカ軍をはじめ国連軍に参加した16か国の兵士、中国義勇軍の兵士など）

財産の被害は通計算出不可の損失

1953年7月27日休戦協定締結：休戦ライン、パンムンジョム

4. 以降65年間の南北緊張関係

部分的交戦、3千万以上の離散家族、極端的なイデオロギー対立、東アジア全体の平和の脅威

5. 北朝鮮の軍備集中、核兵器とミサイル発射

南北間の社会経済的のバラスト崩壊、北朝鮮の「先軍政治」、「核中心政策」

6. 韓国の軍事政権、民主化・統一運動、部分的南北和解

2回の民主化政権と南北の首脳会談、民間・経済部分の協力、北朝鮮の3代世襲と韓国の保守政権回帰、南北と東アジアとアメリカの戦争危機

## 歴史的な対話への転換

1. 韓国のキャンドル革命

韓国の民主市民のパワー、文在寅政府の誕生、南北の東アジアの平和政策の機軸

2. 北朝鮮の金ジョンウン政権の積極的な変化

3. 平和ムードの形成

平昌オリンピック、2018年4月27日の第1回南北首脳会談、2018年5月26日の第2回の南北首脳会談、2018年6月12日の米朝首脳会談、ドラマチックな場面、特に朝鮮戦争のシンボリックな場所であるパンムンジョンでの南北首脳会談の場面は南北の韓国人と東アジア人に感動的なイベント、平和への希望

## 積極的展開と保守勢の懸念

1. 南北、アメリカ、東アジアの諸国の平和実現のための犠牲
2. 南北の韓国人の「ハン」の克服
3. 韓国の保守主義者たちと周辺国の保守勢力の既得権放棄の課題
4. 韓国のキリスト教の主流のアイデンティティーの問題：反共・親米から平和へ

## 日本の教会の参与と仲介を

1. 朝鮮半島の分断と戦争に対する責任認識
2. 韓国の民主化・統一運動における日本キリスト教会の協力の歴史
3. これからの朝鮮半島の平和、東アジアの平和への道に参加する課題

以上

### 平和の歌（ヌチドゥ タカラ）

作詞・作曲 あらがきつぐとし  
新垣壬敏

一、戦争は人間のしわざ

平和は正義のわざ

愛のみのり

つるぎは鋤に

槍は鎌に打ち直そう

二、戦争は人間のしわざ

平和は正義のわざ

愛のみのり

弓をくだき

槍も盾も焼き払おう

（おりかえし）

戦争はおろかなこと

ヌチドゥ タカラ

ヌチドゥ タカラ

与えられたあらゆるものの

いのちを大切にしよう

戦争は人間のしわざ

平和は正義のわざ

愛のみのり

ヌチドゥ タカラ

命こそ宝、

沖繩語で命ほど大切な  
ものはないという意味

新垣壬敏

沖繩県うるま市出身、  
カトリックの作曲家

# 朝鮮半島の南北首脳会談、米朝首脳会談を考える

## 新しい東アジアの状況展開とキリスト教

徐正敏 (ソジョンミン) (明治学院大学教授、同キリスト教研究所所長)

南北対立が脅かした地域平和

朝鮮半島は、1945年に日本の植民地から独立した直後、分断され、そのまま50年以上が経過した。この間、52年には朝鮮戦争が勃発し、この戦争で軍人・民間人合わせて600万人以上の人命が失われた。ここには、韓国人・朝鮮人以外にも、南側を支援した国連軍の15か国の兵士、北側を支援した中国義勇軍も含まれる。また、統計上算出できないが、経済的損害も甚大であった。戦争は約3年にわたって朝鮮半島の南北地域で展開し、53年1月27日に休戦協定が結ばれた。しかし、その後の5年間、南北は、休戦ラインを中心に軍事的緊張関係を続けてきた。その他にも、朝鮮半島は、南北の間のイデオロギーの対立・葛藤、3千万人以上の離散家族、屈地的な戦闘などの問題を抱え、これらが朝鮮半島だけではなく、東アジアの平和を脅かす大きな要因になっていた。

特に、早くに飛躍的な高度経済成長を遂げた韓国とは違い、北朝鮮の社会主義政権は社会経済的にバランスを保った発展をもたらすことができなかった。そのため、軍事力の強化に集中し、とりわけ核兵器の保有を目指し、それによる国内体制の維持を図り、対外的にも脅威を与えることで自国の存在感を示した。このような北朝鮮の政策は、韓国はもちろんで、東アジアの勢力の均衡を危ういものとし、東アジア情勢に関わる日本、アメリカ、中国、ロシアなどの諸国に間に立つ・葛藤をもたらした。韓国の場合は、社会経済的な成長はある程度遂げたが、クルダタによる軍事独裁政権の成立と政治的不安、これに対する民主化運動の勃興、国内の深刻な理念の対立などが続き、政情が不安定であった。一時期、韓国に民主化政権が成立し、金大中政権、盧武鉉政権の時代には、断片的に南北首脳会談が進行され、和解協力の時代を表出する

### 南北の和解・平和に適應できるか

券困気が形成されたことがあるが、これが持続的平和体制を実現するまでの展開にはならなかった。

その後、北朝鮮が積極的な核兵器開発や長距離ミサイル発射などを進め、韓国の保守政権との対立が激化した。こうして、緒についた南北交流は中断された。

#### 歴史的な対話への転換

それが、キャンドル革命を経て、韓国に新しい民主政府である文在寅政権が成立し、2017

7年の平昌オリンピックを契機として、南北対話の新しい局面が開かれた。4月27日に第1回南北首脳会談、5月26日に第2回南北首脳会談が開催され、そして、ついに9月12日に米朝首脳会談が実現したことは、これらの首脳会談が朝鮮半島の平和実現の出発点となる希望をもたらした。4月に、南北の首脳が、朝鮮半島の分断と戦争を象徴する場所である板門店において共に対話する姿は、メディアにより全世界に放映された。6月の米朝首脳会談も世界中が注視した。首脳会談を見守る韓国人・朝鮮人、東アジアの人々には感

#### 積極的展開と保守勢の懸念

開の意義、それにあたって克服しなければならぬ難題、合わせて日韓キリスト教のいくつもの課題を考えておきたい。

第1に、平和ムードのこのような展開は、朝鮮半島の南北両国、北朝鮮とアメリカ、アジアの周辺国が、平和実現のために一部の既得権を放棄していく可能性が見える。例えば北朝鮮の若い権力者は、従来保持してきた孤立・独占・武力(核武装までも)を放棄し、新しい未来を開拓したいとの意志を見せてい

る。韓国もキャンドル革命後の民主政権として、朝鮮半島の平和のためにいくつもの社会的経済的負担を受け入れることを積極的に検討している。アメリカ、中国、さらに日本までも、東アジアの平和実現のために、多少の犠牲を払っても積極的な役割を果そうとする姿勢を見せている。ここに歴史的な意義がある。

第2に、歴史的な南北の首脳間の出会いにより、多くの韓国人は、非常な感動を経験した。それは、韓国において歴史的に

積み重ねられてきた、心の奥底にある「ハン」の感情、つまり恨みや悲しみ、悲哀や無常観や諦め、あこがれや妬み、悲惨な境遇からの解放願望といった重層的で複雑な感情を乗り越えさせるようなエネルギーを持った感動である。ここに至った要因は、新しい政治的展開もあるが、何よりマスメディア、SNSによって首脳会談の影響が深く浸透し、南北の出会いを感動的に受け止める土壌となったことにある。

第3に、しかし、大きな課題もある。韓国の保守的既得権勢力は、まだ本場の意味での南北の和解・平和に対する準備ができていない。彼らは今まで、南北の分断・対立・葛藤を利用して自らの利益を守ってきた勢力である。このことは、韓国内部の保守勢力だけではなく、周辺国における保守勢力も同様である。これらの勢力は、東アジアの平和のため、これまで自分たちの抱えてきたものを克服しなければならぬ。これが大きな課題の一つである。

第4に、こうした状況に対する韓国キリスト教の立場を考えると、基本的に分断と戦争の大きな被害者であると言えらる。被害者であることが背景と

なって、韓国には徹底的な親米反共のキリスト教が形成された。韓国のキリスト教の主流派は、本場の意味での南北の和解・平和にはまだ適應できない。例えば、韓国の保守的キリスト教の一部は、今でも、星条旗と太極旗を掲げて、韓国政府の北朝鮮の政権を認定する南北和解政策を批判するデモを続けている。彼らに新しい時代認識が必要であることも、課題の一つである。

#### 日本の教会の参与と仲介を

最後に、こうした近年の動きに対する日本のキリスト教の課題を考えておきたい。南北の分断と朝鮮戦争、現代史の流れにおいて日本の歴史の責任は軽いものではなく、朝鮮半島分断の責任は日本にもある。この責任を、早めに自覚した日本のキリスト者は、戦争責任告白以後、特に韓国のリベラルなキリスト者と協力しながら、韓国の民主化運動と朝鮮半島の統一運動に

対して、積極的な協力者、仲介者の役割を果してきた。韓国の民主化運動と統一運動の歴史の中で、日本のキリスト者たちは、歴史的に大きな役割を果してきた。こうした歴史を基盤として見ると、これからの南北の平和、東アジアの平和の米来のために、日本人の協力的、日本のキリスト者たちの積極的な参与が期待されるのである。

クリスチャン新聞 (二〇一八・七・八)

## 南北和解へ動く韓国ロマン主義（韓国語版も）

「酒」を好む風流でエモーショナルな政治がそこにある

徐正敏 明治学院大学教授（宗教史）、キリスト教研究所所長

\*WEBRONZA 初めての試みです。この記事は筆者に日本語と韓国語の2カ国語で執筆していただきました。[韓国語版 \(한국어판\)](#) でもご覧ください。2018年7月25日

### 越えねばならぬ山はたくさんあれど



ソウル中心部の道路を埋める朴槿恵大統領の退陣を求める人たち  
=2016年11月

朝鮮半島の雰囲気が変わった。平昌オリンピックまでは軍事的緊張のただなかにおかれていた。核兵器の完成を宣言し、ICBMの発射を続けていた北朝鮮の行動は、朝鮮半島だけでなく東アジアと太平洋地域の大きな脅威のはずだった。

4月27日、歴史的な南北首脳会談を起点として、朝鮮半島に新たな平和ムードがあらわれた。5月26日に急遽ひらかれた第2次南北首脳会談、そして6月12日のシンガポールにおける米朝首脳会談へと、朝鮮半島の緊張緩和を促す動きが連続したことは周知の通りである。

大部分の南北の韓国・朝鮮人たちは、平和に対するエモーショナルな希望をもち、統一の夢さえも語るようになった。実際には、朝鮮半島と東アジアに真の平和が定着するためには、越えなければならない山、すなわち解決しなければならない課題が、文字通り山ほどある。

にもかかわらず韓国人たちの心では、すでに南北鉄道は連結されて中国やロシア、そしてヨーロッパまで走ろうとしているのである。ここでは、このような韓国人たちの韓国的な感情のあり方に注目してみたい。

日本は「宿」、中国は「飯店」、韓国は「酒幕」

筆者は次のような文化比較を試みたことがある。日中韓の「旅館」の呼称についてのささやかな考察である。

日本では伝統的に旅人が泊まる場所を「宿」と呼ぶ。「旅館」「温泉宿」などの語もあり、「ホテル」もふくめて、基本的には「お泊り」である。つまり、旅館の主として意味するところは「一晩泊まって寝ること」である。文化的にいうならば、旅館は「寝るため」にあり、食べて、飲んで、旅の風情を全部楽しめる空間ということになる。もちろんそこには日本文化のトレードマークともいえるべき「温泉文化、沐浴文化」が深く関わっている。入浴し、食べて飲んで人々と楽しみ、そして寝る、それが日本の「宿」である。



酒幕は、朝鮮半島の伝統社会において旅人が飲食や宿泊をする施設であり、情報交換の場でもあった。これは1920年ごろに建てられた酒幕を再現したもので、もとの屋根は草葺きだったが、展示にあたり銅板に変更した＝国立民俗学博物館のHPより

中国では昔から旅館を「飯店」と呼ぶ。すなわちそこはご飯を食べる場所で、飲んで、寝て、人にも会うところである。世界最高を誇る中国料理の世界、「食」こそが一番大切であると考えた中国の庶民文化の実利的な価値観を連想させる言葉であろう。中国への旅行のときたまたま泊まったホテルの「豪華大飯店」

という名称を思い出す。中国の「飯店」はそのまま旅行文化の中心になっていて、そこには計算高い中国文化の価値観も透けて見える。

韓国はどうか。伝統的には「酒幕」という。すなわち酒場である。酒を飲む場所でご飯を食べて、寝て、人にも会う。「酒を飲むこと」が最も重要なのである。三ヶ国を比較すると一番よくない文化的特長のあらわれと思われるかもしれない。しかしその「酒」は、文字どおりの意味だけではない。そこには芸術的な志向が含まれていて、実際に酒を飲むかどうかではなく、風流の感性をもって世界をみるというロマンティシズムが滲み出ているのだ。

韓国人が旅に際しての一番に思い出す古人はいわゆる「放浪者金サッカッ」（朝鮮時代後期の詩人、1807-1863）である。「詩一首で酒一杯」という金サッカッにま



つわる伝承である。定まった目標の場所もなく、足に任せてという韓国人の旅は、彼のような文化的伝統の反映であろう。そしてそのような旅の習俗と感性は、韓国人が創造的能力を発揮する力の根源ともなっている。

ここで比較した筆者の個人的な感想と単純な「名称比較」は、枝葉末節的な文化理解かもしれない。三ヶ国の異同には他にも考慮すべき要素がたくさんある。しかし旅館の名称ひとつとっても、旅人の感情移入がこんなに異なるということは、筆者にとって新奇な発見であった。もちろんこれは優劣の問題ではない。同一漢字文化圏である日中韓三国のなかに、このような差異があることに驚かされるのである。

このように考えてみると、アメリカの「モーテル文化」とはなんとも無風流に感じられる。一体何が特徴なのか、意味するところも分からないまま、ただ単に遠いところまでいくという目的に必要な「ガソリンスタンド」のようなもの、もっと酷くいえば「馬小屋」のような印象をもつのは筆者だけだろうか。

アメリカを旅行して時々感じるのは、そこでは旅行とは「疾駆すること」であるし、モーテルは走るための力を充填する空間にすぎないということである。そこには「宿」も、「飯店」も、「酒幕」もない。(参照：[筆者ブログの「旅館の呼称」のハングル原文](#))

## 南北首脳会談は「ハン」を乗り越えるセレモニーだった

世代の差がかなりある南北の首脳が、会談のスケジュールの一環としていわゆる「徒歩橋」を一緒に散歩した。そこには随員も通訳者もいなかったし、記者たちも退



板門店の軍事境界線を一緒に越える韓国の文在寅大統領（右）と金正恩朝鮮労働党委員長＝2018年4月27日、韓国共同写真記者団撮影

けられた。そして遠く離れたところから無声映画のようにテレビカメラだけが二人をズーム・インした。

真顔の表情の対話、たまに笑顔、優しいジェスチャー。平和な鳥の声だけがみちていた。その場所は朝鮮半島における対立と緊張のシンボルの

ずであったが、彼らはそこで古くからの友人のように一緒に散歩して、談笑を交わした。それを南北の韓国・朝鮮人と世界の人々が見守った。

韓国人たちは涙を流しながらこの場面を見た。対話の内容はそんなに大事ではない。分断 73 年、朝鮮戦争 68 年の傷跡と痛みで満ち満ちた韓国人たちの「ハン」（トラウマ、「恨み」といった意味の韓国的表現）が解ける瞬間だった。

もう争う必要がなくなるかもしれない、とうとう我らの願いである統一ができるかもしれないという、韓国民族の「ハンプリ」（「ハン」を乗り越えるためのシャーマニズム的な祭祀に由来する韓国の言葉）のセレモニーでもある。

南北の首脳たちはそれを予期していたかもしれない。ドラマチックな場面一つから得られる政治的効果は、我々の想像をはるかに超えて、千倍、万倍にも達する。

南北はまず首脳会談以前に、スポーツ交流と南北合同チームを作った。そして南北の芸術家たちが南北を往復しながら公演を行った。南北の観客は涙で南北の歌と踊りに応答した。これこそ韓国人のエモーショナルな特質が発揮され、利用された政治学である。

旅人が泊まるホテルを「酒幕」と呼んで、そこで「詩一首で酒一杯」を楽しんだ韓国人。今も歌と踊りが日常生活の中にあり、世界中に「韓流大衆文化」の国として認知されている韓国に最も似つかわしく、有効な「エモーショナルな政治」が今まさに朝鮮半島で進行しているのだ。

現在進行中の朝鮮半島の状況変化について、日中韓の認識やアプローチは、それぞれに異なる国民性と関係があるはずだ。特に韓国の現代史における極端な政治変革や急速な経済成長、民主化運動と統一運動の活発な展開も、このようなエモーショナルな特質をもつ国民性のなかに、そのダイナミズムを発見することができる。延べ数千万人が参加したとされるいわゆる「キャンドル革命」による政権交代や、その一方で、南北の和解に反対する反共保守グループの継続的デモなども、このようなエモーショナルな国民性と深く関連していると思われる。

**\*徐正敏教授には今後も日本語と韓国語の 2 カ国語で随時ご執筆いただきます。ご期待ください。**

朝日新聞インターネット版 “WEBRONZA”